REBORN!に転生☆

レベッカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＲＥＢＯＲＮ！に転生☆

【Ｎコード】
Ｎ２４０９Ｕ

【作者名】
レベッカ

【あらすじ】
えー、文才のない作者と、リボーンのキャラクターがおくるドタバタ（？）ハチャメチャ（？）ラブ（ではなさそうな）コメディです。ただ、無計画に書いているのであしからず。◇◆ただいま“ヴァリアー編”を蛇行中◆◇

標的1　ありえないことも、時には起こるものだ。

あぁ、これは夢だ。きっとそうだ。絶対そうだ。そうでなければ…

「どこが良いかな…」

こんなカッコイイ男の人が、パソコン（であろうもの）に向かって、一人でつぶやいているわけがない。いや、むしろここは死後の世界で、ありえないことが起こるところなのだ。そういえばかすかに記憶がある。あの時――――

「何よっ！あんたさえ…あんたさえ居なければ！」

そう言ってその女の人は、ポケットナイフを差し出していた。

「ち、ちょっと！それで何する気よ！」

相対していたもう一人の女の人が叫んだ。その瞳には驚愕と、恐怖が満ちていた。

「あんたを殺して私も死んでやる！」

そうしてナイフを手にした女の人は、彼女の敵であろう目の前の女の人に突っ込んでいった。

ユウキは、昼ドラのごとくグチャグチャした光景を、凝視していた。あぁ、そりゃもうガン見していた。一度は目を離そうかと思ったが、

このチャンスを逃せば、もう二度とこんな光景を拝むことはできないだろう

そう、思ったのもまた事実であった。

ナイフを持った女の人が、ハイヒールと昨日の雨の水溜りのせいでこけた。そりゃもう豪快に。ナイフは転がり落ち、女の人は立ち上がれずにいた。きっと足でも捻ったのだろう。ユウキはとっさに、その女の人に手を差し伸べていた。
と同時に背中に激痛。女の人の叫び声。そして後ろを振り返ってみる。そこにはナイフを持った、もう一人の女の人がいた。

「う、そ…なん…で……？」

そう言った後に、ユウキは倒れた。

～回想終了～

「はぁ…」

ユウキは溜息をついた。自己嫌悪の溜息。ユウキは昔から、面倒事を引き付けるタイプであった。そしてその大抵は、他人同士のケンカに巻き込まれるものであった。小学生の時は、ケンカしている

男子たちを止めようとして、金魚の水槽に突っ込んだ。中学生に上がったばかりの時は、いわゆる不良というもの同士のケンカのとばっちりを受け右足骨折。2週間前には階段から落ちた。そして今回の――――

「…はぁ…」

思い出しての自己嫌悪。本当に面倒くさい人生だったなぁ、と改めて思うユウキであった。

ただ一つ、腑に落ちないことがあった。

はたして人間は、ポケットナイフで刺されたくらいで死ぬものだろうか？

「あー、それについてはこちら側のミスだ」

いきなり、パソコン（であろうもの）に向かっていた男の人が言った。しかしまだパソコン（であろうもの）に向き合っている。

「へ？ミス？」

ユウキは彼が言っていることが理解（わか）らなかった。というか彼がいきなり声を出したことにもびっくりだった。

「あぁ、ミスだ。まったく、どこぞのバカが教育を怠った所為で、

俺までとばっちりだ、くそ」

後半は愚痴にしか聞こえない。だけどユウキは思った。この人は何か知っている。

「あの、ミスって何がですか？というかここは何処でしょうか？」

ユウキが言った言葉に、彼はめんどくさそうに椅子（オフィスにありそうな感じのもの的な）を回しユウキの方を向いた。

「んー、とりあえず自己紹介。俺の名前は…そうだな…レイ、とでも呼んでもらおう。ちなみにこう見えて２７１８歳」

２７１８歳…え、何？それは笑う所？

「いやいや、事実だから」

え、何？なんで考えてることが分かるの？

「…まさか君……何も知らない系か？」

はい？何を？

そう言う（？）と、レイ、さん（？）はすごく落ち込んだように項垂れた。

標的2　ついてない人生

「うわー、はずれくじ引いちまったよ…」

ユウキには、レイが何を言っているのか分からない。とりあえず、何だか…

バカにされた気分だ。

「はぁ、悪い。うん、この世の中たくさんの人間がいるからな。たとえ?転生?という単語を知らない人間がいてもいいだろう。だが……」

だが、の後に彼は言いよどんだ。何か重大なことでも言うのだろ――

「一から説明すんのメンドクセーなぁ」

聞いてるユウキの方がメンドクサイことは、言うまでもない。

「あー、うーんと、どこまで話したっけ?あ、いや、何も話してないか」

ユウキは半ば「なんだコイツ」と思いながらも、口には出さなかった、が。

「なんだコイツ、とか君。神に対してそれはないだろう？」

神、かみ、紙、髪？

「変な変換すんな！神だ！」

彼は何か気に障ったらしい。いや、ふつうは嫌か。髪なんて言われたら。

「まったく、これだから最近の若いもんは……まぁ、いいや。で？君は自分の状況、どこまで把握している？」

レイがそう言ったので、ユウキは答えた。

「現在、自分が把握していることは何一つありません」

ここで初めての会話らしい会話の第一声は、明らかに冷たかった。この口調のせいで、何人友達を失っただろうか。

だがレイは、そんなこと構わず話始めた。

「そうだな…じゃあまず、君に言わなきゃならないことがある。一つ目は、君が死んだ、ということだ」

ユウキは半ば驚きもしなかった。だって予想範囲内だったから。

「二つ目。その原因は、見習い天使の判断力不足だ」

少し驚いた。天使のせいで死んだのか…

「そして三つ目。君は君の寿命まで、別の世界で過ごしてもらうことになった」

「はい――――？」

これにはかなり驚いた。

「ゆえに、今、様々ある世界の中で、君にぴったりの転生先を探していたわけなんだが……悪い。さっぱり見つからなかった。なので……」

そういってレイが取り出したのは一本のダーツの矢。

「ダーツで決めようと思う」

レイが満面の笑みでそういうと同時に、ユウキとレイの足元には、様々な選択肢が描かれた。

その中にはユウキが知っているアニメやマンガの名前もあった。

「よっ、と」

レイはダーツの矢を投げた。その行く先は……あれ？矢の行き先が曲がったような…？いや、むしろ方向転換して元の方に戻ってい

るような……

ドスッ

ダーツの矢が選んだのは『家庭教師ヒットマンＲＥＢＯＲＮ！』と書かれた場所だった。というか…

「絶対、故意にここに当てましたね？」

ユウキは言った。

「おや、よくわかったね」

レイが言った。

「フツーに気づきますよ！明らかにダーツの向きがおかしかったでしょうに！」

ユウキはまくしたてるように言った。まぁ、攻めているつもりもないが。

「んー、ま、いいじゃん？どこでもいいでしょ？リボーンの世界だって。楽しいよ、絶対。いや実は偶然にも、その世界は俺の管轄なんだよね」

レイの笑顔は爽やかだった。さぁ、何が起こるのだろうか。ユウキにはまだ、分からなかった。

標的3　もっと良い場所があったろうに…。

「ほぅわっ」

ユウキが落とされたのは、どこかの部屋らしい。すわり心地のいい、ふかふかのソファーがあったのが、何よりも嬉しい。それというのも……

「さて、まぁ、とりあえずその世界に行こう。そうと決まれば……」
「待ってください。まだ何の説明も受けてません」

さっさと話を進めるレイに、ユウキはストップをかけた。明らかに現状を把握しきれていないのに、レイには人を労わるという気持ちがないのだろうか。

「失敬な。人を労わる気持ちくらいちゃんと知っている。ただ、君は同情こそすれ、労わるに値する人間ではな……」
「そうですか、じゃあもういいですよ。それよりも、きちんと説明してください」

ユウキは労わりよりも、現状把握の方が優先、と考えた。

「しょうがねぇなぁ、じゃあ、何から知りたい？」

レイは投げやりに言った。

「とりあえず、天使のせいで死んだ理由が知りたいです」

ユウキがそう言うと、レイは溜息をついてこう言った。

「ああ、見習い天使の下界実習中にお前は刺された。それを、マヌケな実習生が死んだと勘違いして魂を天界(ここ)へ連れてきたんだよ」

ここまでついてない人生って、あるのだろうか。神は何故このような運命お与えになったのだろうか———

「いや、その神って俺だから」

しばらくの沈黙のあと、ユウキはまた口を開いた。

「で、リボーンの世界で何をすれば？」

「あー、それは……いろいろだ。いろいろ。それはまた後で話すよ」

レイはテキトーにそう言った後、パンッと手を打って、何やらニコニコしだした。

「フフ、では転生転生。いやー実は楽しみなんだよねぇ。これで俺の人生が変わると思うと顔がにやけてくるなあ」

「あ、言い忘れるところだった。左目にはいつも眼帯しといてね☆」

すでににやけ顔のレイが言った。そして手を振りながら言う。

「じゃあね☆どこに落ちるか分からないけど、多分生きてはいられるから」

「な、え、ちょっと！？」

意味の分からない言葉を聞いた後、ユウキの意識は遠のいていった。

〜回想終了〜

で、今現在ユウキがいる場所は何処だろうか。あたりを見回すと……ソファー、テーブル、デスク……と書類の束。割と小奇麗な部屋だった。窓からは、グラウンドが見えた。

どこかの学校の……何の部屋？

ユウキが考えを巡らせていると、ガチャッとドアを開ける音がした。ユウキが振り返ると、そこには妙に威圧感のある顔つきをしたイケメンがいた

ヒバリさんっ！

がいるということは、ここは並中応接室。
ちなみに、ユウキは基本マンガもアニメ（ドラ〇もんなどは除く）も見ないが、レイが基礎知識を植え付けたので、ユウキにも理解できるのである。

「君、何してんの？その制服、うちの生徒？」

そう言って、ヒバリはキッとユウキを睨み付けた。ユウキは恐れを感じながらも、口を開いた。

「あっと、えっと…き、今日から並中に転入することになった深水（しみず）優姫（ゆうき）です」

「ふうん、転入生。で、風紀委員に何の用？」

いまだに疑わしそうな目でユウキを見るヒバリ。　ユウキには気の休まらない時間が続く。

ただ一つだけ思った。

もうちょっといい場所に移してくれたらいいのに

ニヤニヤとしたレイの顔を思い浮かべると、心底腹が立ってきたユウキであった。

「…君、いつまでここにいるの？早く出てってくれない？」

「し、失礼しましたぁーーー！」

ヒバリが睨み付けながら、今にも咬みつきそうな勢いですごむので、ユウキは思わず逃げ出してしまった。

標的４　リボーンに会いました

並盛中学校２年Ａ組

ガラッと担任がドアを開ける。

騒がしかった教室内がシンと静まりかえる。

担任が教室に入り、ユウキも続けて教室に入る。

生徒たちが一様にユウキに注目し、それぞれに話し始める。

担任はざわざわした生徒たちを黙らせてから、ユウキの紹介に入った。

「えー、獄寺に続き、イタリアに留学していた転入生の、深水優姫さんだ」

その瞬間にまた、クラス中が騒ぎ始める。

「帰国子女！しかも超可愛くない？」

「俺のタイプだー」

「眼帯……萌え」

「笹川に続く並中アイドル誕生じゃないか？」

「えー、では深水は……あそこの後ろの席に座ってくれ」

ユウキは担任に言われるままに席に着いた。隣はおとなしそうな男子だった。

「よろしく」

ユウキが笑顔で笑いかけると、相手も「よろしく」と言って笑った。その笑顔に、ユウキはドキッとしてしまった。眼鏡で隠れていて、顔はよく見えないが、かなりのイケメンさんだとユウキは思った。名前は「矢野拓麻（やのたくま）」というらしい。

授業も終わり、下校時刻になった。

「ねぇ、深水さん。一緒に帰らない？」

そう話しかけてきたのは、京子ちゃんだった。そういえば休み時間に、家が近いことを知ったのだ。

（ちなみに、ユウキが自分の家を知っているのは、レイの計らいである。今までの記憶が頭に入っていた）

「はい。ぜひ」

ユウキはそう言って、立ち上がった。

「深水さんてさ…」

教室を出てすぐ、京子ちゃんがそう言ってきたので、ユウキは「ユウキでいいです」と言った。

「ユウキちゃんの髪の毛の色って…」

「あぁ、こう見えても自分、その……ハーフなので。茶髪なんです」

ユウキは少し言いづらかった。

「そうなんだ。でもなんか…茶色っていうよりピンクっぽいね。可愛い」

「ありがとう」

「それにその眼帯も。ファンキーでおもしろい」

「……それについてはノーコメントで」

（眼帯の件は除いて）ユウキは驚いた。ハーフであること、茶髪であること、その全てが今まではいじめの対象若しくは嫌われる原因になってきた。褒められたのは初めてだった。

ユウキの心には、温かいものが生まれた。

下駄箱で靴を履きかえた後、グラウンドを眺めながら校門へ向かった。ちょうど野球部が練習を始めるところだった。

「あ、ツナ君たちだ」

京子ちゃんの視線の先を見ると、確かにツナと獄寺とユニフォーム姿の山本がいる。三人はこちらに気づかずに話している。

「ツナ君」

京子ちゃんが三人に近づいて声をかけたので、ユウキもそれについて行った。

「三人とも何してるの？」

京子ちゃんがそう尋ねると、三人はそれぞれ

「な、なんでも無いよっっ」

「ん？マフィアごっこの話だよなっ」

「うっせーんだよ、野球バカ」

見事に言うことが性格を表している。（誰がどれを言ったかはご想像にお任せします）

三人がそう言った後、ユウキに気づいた。

「あれ、君は転入生の……」

「おー、イタリアから来た、確か深水とかいう」

「……」

これまた言うことが性格を表している。（誰がどれを言ったかは以下略）

「転入生の深水優姫です。よろしく」

これが、この挨拶が、ユウキの人生（二度目の）を変えることになる。

え、前回リボーン登場してたの？――はい、野球部員に変装して。

ドスッ

「痛っ！なんだ…？」

ツナがいきなり大声を出した。どうやら背中に何か当たったらしい。前のめりになった。そしてツナの後ろには……

「リボーン！？」

またもツナが大声を出した。そしてリボーンと呼ばれた、黒いスーツに身を包んだ赤ん坊は涼しげに言った。

「ちゃおっス。ツナ、背後がら空きだぞ。もっとマフィアのボスらしくしろ」

「う、うるさいな。大体学校には来るなって何回も……」

必死に反論するツナを無視して、リボーンはユウキの方に近づいてきた。

「お前が転入生か。名前は？」

「……深水、優姫」

「ユウキ…か。――ところで、お前、マフィアにならねーか？」

ユウキがそれに答えようとしたとき、ツナが叫んだ。

「死んでもおことわ……」

「わ――ちょ、お前！変なこと言うなよ（しかも京子ちゃんの前

で）」

「どうしたの、ツナ君？」

そう訊いたの、は京子ちゃんだった。

「い、いや！何でもないから！！気にしないで！」

「うるせーぞ、ツナ。お前、今度の日曜日補習のくせに」

「それとこれとはカンケーないだろ！」

「しょうがねぇな。今日は一先ず帰るぞ。調べたいこともできたしな」

「何がしょうがないだよ。……調べたいこと？」

「ほら、行くぞ」

こうしてツナとリボーンは嵐のように去って行った。

「じ、十代目！？」

「…どうしたんだろう？」

「なんか用事があったのかもな」

ユウキ以外の三人が言った。その直後。

「十代目！！置いてかないでください！！！」

獄寺はツナたちが去った方向に走って行ってしまった。

「んじゃ、オレ部活あっから。またな」

山本は野球部の練習に戻ってしまった。

「私たちも帰ろっか」

京子ちゃんが言ったので、ユウキは「はい」と言って、二人で歩き出した。

帰り道は、京子ちゃんと二人でいろいろな話をした。まぁ、主にユウキの質問に京子ちゃんが答えてくれる感じだったけれど。その中でも、一番おもしろかったのは、ツナや獄寺、山本の話だった。

「ツナ君ってね、あぁ見えて、結構おもしろいんだよ。獄寺君も山本君もだけど」

京子ちゃんがそう言うので、ユウキは質問してみた。

「そうなんですか。…そういえばさっき、赤ちゃん連れてましたね」

ユウキがそう言ってみると、京子ちゃんは何のためらいもなく「あのね、リボーン君はね、ツナ君の家庭教師なんだよ」と言う。

———普通の人に言ったら、きっと怪しまれるよ……

ユウキはその言葉を飲み込んだ。

「家庭教師？」

ユウキがわざとらしく訊くと、京子ちゃんは言った。

「そう、家庭教師。って言ってるけど、ツナ君のいとこなんだって。可愛いよね」

無邪気に笑っていた。

「あ、ここでお別れだね。じゃ、また明日」

「はい、また明日」

学校の帰り道の、十字路。「また明日」なんて、あんまり言ったことないな。

ユウキはちょっぴり嬉しくなった。

さて、家に着くと、そこには———

「おっかえりー！」

「おかえりなさーい」

「おかえり」

三人が待ちかまえていた（約二名テンションおかしいが）。

「…ただいま」

ユウキがテンション低くそういうと、

「やだな、ユウキちゃん。もっと明るく明るく！ね？」

そう言うのは、金色の短い髪にブルーの瞳の、いかにも外人さん、って感じの男の人。名前はカイ。これでもレイの部下（↑神に部下？）

「そうですー。女の子なのだからもっと笑うですー」

そう言うのは、カイと同じく金色の髪（長くウェービーな感じ）に、ブルーのくりくりした瞳の、いかにも外人さん（幼女）って感じの女の子。名前はルル。これでも天使（間違えてユウキを殺した）

「お前らうるさいぞ。これだからバカは…」

そう言うのは、黒い、男の人にしては長い髪に、吸い込まれそうな漆黒の瞳の（神がこんな悪魔のような色していていいのだろうか？）イケメンさんって感じの人。名前はレイ。無論、神（第一話参照↑あんまりレイの、というか登場人物の説明してねーな。すまん。ｂｙ作者）

「さて、これからどうするか、まだ話して無かったよな」

レイがソファーに座りながらそう言った。見た目、偉そうだ。
ちなみにこの家、そんじょそこらの家とは比べ物にならないくらいきらびやかな装飾が施されたお屋敷だった。並盛町じゃ目立ちすぎると思うが、レイの趣味だ。（趣味悪）

「下界に降りてきて、俺が思考を読めないからって、頭の中で悪口言わないの」

――明らかに聞こえてそう……

まぁ、実際は聞こえていないのだが。
なんでも、神は天界でしかその能力を発揮できないらしい。使えねー。

「さて、お前にはこれから?堕ち神狩り?をしてもらう」
「オチガミ…ガリ?」
「そう、堕ち神狩り」

ユウキが頭の中でその言葉を反芻し、理解するまでの数秒、その場には沈黙が流れた。うるさいあの2人（カイとルル）でさえ静かだった。
そしてユウキは決断した。

「ヤダ」

「は？」
「え？」
「ぷ…ククク」

レイとカイの驚きの声。そしてルルの笑いをこらえた声が、広い室内に響き渡った。その直後、

「ぷ、わーははは っ。レイ、ふ、振られてやがります～キャハハハハ」

幼女の見た目（ちょっと言葉変態くさいかな）にしては、ひどい笑い方をしたルルの声が緊張の沈黙を破った。

標的６　え？標的５は何処？――空の果てに（ｒｙ

「い、イヤって…拒否するなよ！」

レイが叫んだ。ルルはまだ笑い転げているし、カイはどうでもいいや、とでも言うように紅茶をすすっている。

「……おま、転生させられた意味わかってる？堕ち神狩りのためだぞ？」

レイはややテンパりながら、ユウキを何とか説得しようとあれこれ言ってくる。

「い、今なら、コーヒー一年分！マシュマロ一年分！アイス一年分！」

「乗るか」

ユウキはそれでも拒否した。そんな堕ち神狩りなんて物騒な響きの話に乗れるもんか。

「フッ、お前も頑固だな。しょうがない。堕ち神ひとり倒すたびに願いを１回かなえてやろう」

レイもなかなか引き下がらない。とうとう神の権限を持ち出して

きた。さすがにこれにはユウキも意志がぐらついた。

「……堕ち神ってどのくらいいるの？」

「おぉ、やっと興味を持ったか。そうだな、この世には3人の堕ち神が存在している」

レイが落ち着きを取り戻そうとしながら、しかし説得が上手くいったと思って興奮している。

もう少し落ち着いた人かと思ってたんだけど……

ユウキの、レイへの好感度は下がるばかりだった。

「そもそも堕ち神というのはな――――」

ユウキは聞いていて15秒で飽きてしまった。ぶっちゃけ、興味ない。神の事情とかどうでもいい。

「――――という訳なんだが、実際は――――」

～5分経過～

「――――なんだぞ。だがここでもさっきの――――」

～15分経過～

「――ということだ。どうだ、分かったか？」

レイはキラキラとした目をユウキに向けた。

「まったくもって分かりませーん」

レイとは対照的にユウキは、冷たい目をレイに向けた。そんな様子を傍から見ていたカイが、紅茶を一杯飲み終わってから口をはさんだ。

「つまりレイが言いたいのはね、堕ち神は敵、ということだよ」

「カイ、それは俺がさっき説明した。二度も言う必要はない」

カイに言い直されたのが悔しかったのか、レイはツンツンとした声でそう言った。

「レイ、君の説明は長いうえに無駄なんだよ。もっとスマート、スマートに」

「うっさいわ、ボケ」

そんな感じのコントが何回か繰り返された後、ユウキはやっと口を開いた。口を開けた。

「自分、堕ち神狩りやってもいいですよ」

その言葉を聞いた時のレイの嬉しそうな顔を見たら、何だかユウキも嬉しくなってきた。

「ただし、堕ち神ひとり倒すごとに、お願いごと3回で」

「3回！！！！！！！」

その言葉を聞いた時のレイの表情の変化は、とてつもなく面白かった。

「で？自分は具体的には何をすればいいのでしょうか？」

レイのショックも落ち着き、無事ユウキの条件が認められたところで急に真剣みを出して言った。

「良い質問だ。よし、説明してやろう。ユウキ、お前につけてもらっている眼帯を外してみろ」

ユウキは言われたとおりに眼帯を外した。そしてレイの持っていた鏡で確認してみる。

「何、コレ？」

ユウキはそう言うことしかできなかった。ユウキの左目には、なんとクロスが刻まれていたのだ。いや、正確にはクロスが浮かび上がっていた。

「それは≪十字の在処（ドヴェ・ディ・クロス）≫だ。我々はただ単にクロスと呼んでいる」
「ドヴェ…ディ……？」
「ドヴェ・ディ・クロスだ。十字の在処、つまり神の在処を表す」

ユウキはあまり理解できなかった。

「……？」
「あー、ったく！だぁかぁらぁ…」

ユウキの頭の上に？が飛んでいるのを見たレイが、イライラしながら怒鳴ろうとした。その時、

「つまり、クローム髑髏のようなものだよ」

カイが助け船を出した。良かった。もう少し遅ければ、レイの無駄に長い説明（という名の自己満演説）の餌食になるところだった。

「まだこの話ではクロームは出てきていないけれど、つまりはそういうこと。クロームがいるからこそ、六道骸は戦える。それと同じ原理さ」

カイの分かりやすく、かつ短い説明でやっとユウキにも意味が分かった。

「つまり、下界(ここ)では力の使えない神(レイ)を戦えるようにする、ということかぁ」

ユウキがそう納得したところで、レイは咳ばらいをした。説明という名の演説が出来なくて、やり場のない興奮が抑えられないのだろう。

「えー、つまりはそういうことだ。そして、一つ重大なことを言い忘れていた」

いかにも神妙な顔つきなので、カイもユウキもゴクリ、と唾を飲み込んで話を聞いた。

「今の時間軸は、ちょうどヴァリアーが来るあたりだ。そして、その中に堕ち神がいる」

レイがそんな重大なことを言ったとき、ルルは完全防音の特種結界の（カイが囲んだ）中で終始笑いっぱなしだった。

標的7　趣味の悪い家には住みたくないな…

「ヴァリアーの中に、堕ち神？」

ユウキはレイの言葉を復唱した。ヴァリアーには悪い思い出しか……思い出？

ユウキはそう自分の記憶を探っているうちに気づいた。

「……何で、自分の過去はあんなことになっているのでしょうか？」

ユウキの過去は、レイが作り出したものだった。その概要は…

イタリア生まれイタリア育ち、そこそこのお嬢様だったが、ある日詐欺師に騙され没落。生き延びるために身につけた能力は護身用の体術。そこそこ良い家庭教師をつけていたが、没落後はマフィアの子どもも多く通うといわれている学校に通う。そこでの稽古で体術の力が上がり、見事１１歳でヴァリアー入隊。しかし２年で脱退。以後日本にわたり現在に至る。

「なんというか、まぁ、あれだね。どこからどう見てもご都合主義

の過去作ったね、レイ」

カイがレイを見て言った。これにはレイも何も言えないらしく、少し拗ねたように、

「……お前、仮にも俺は神でお前の上司だぞ？扱いがおかしくないか？」

と言った。確かに、とユウキは思った。そういえばさっきは、レイのこと『君』とか言っていたような…

「そう？良いんじゃない、幼馴染なんだし」

初耳だった。神様に過去というか幼少期なんてあったの？不意を突かれたように何も反応できなかった。

「まったく、ルルのこと忘れやがってますね？おかげで腹筋痛いです」

むっとした顔の幼女もといルルが突っ立っていた。というか羽で飛んでいた。さすが天使。

「あ、ルル。結界から出てきたんだね」

そう言うのは結界を張ったカイ。先程からずっと紅茶を飲んでい

る。何杯めかもわからぬほど。

「フフン、カイの脆弱な結界などこのルルには無意味です」

胸を張るルル。そこにカイが突っ込んだ。

「あの結界、君の笑い声が消えると同時に解除されるようにしたんだよ」

「……君たち？大事な話の途中だよ？」

さっきから置いてけぼりのレイが口を開いた。どことなく寂しそうだ。

「とりあえず、ユウキ。これ持っておけ」

そう言ってレイが差し出してきたのは指輪だった。銀色の、何の装飾もないシンプルなものと、ボンゴレリングにも似た形状のものの二つ。

「何、コレ？」

ユウキには、状況も渡されたものがなんなのかも理解できなかっ

た。ただ嫌な予感がすることだけは確かだった。

「これは忠実なリング、フェデルタリングだ。二つで一対の、至上最高のリングだ」

レイが少し真面目に話すので、ユウキも少し緊張していた。

――――フェデルタリング……至上最高の……

ユウキはまじまじとその指輪を見てみる。見た目はやっぱり普通の指輪で、でもやっぱり何か力がわくような、そんな感じがした。

「忠実なリングって？」

ユウキが誰にともなく質問した。その問いにはレイが答えた。

「それは……ってもうこんな時間か！？そろそろか、じゃな」

レイは言いかけていた言葉を、言い直しもせずに消えた。それに続きカイもルルも、

「それじゃあね、ユウキちゃん」
「バイバイです」
三人はいきなり姿を消してしまった。絢爛豪華な悪趣味な部屋に、残るはユウキただ一人。さて、彼女の運命はこれからどうやって変わっていくのだろうか？それは神様だけが……
いや、誰も知らない。

「深水、優姫……こいつはやばいかも知れねぇな」
沢田家屋根裏部屋では、リボーンがひとりユウキの真実に近づいていた。
無論ヴァリアーの件についてだが。

標的８　ヴァリアーの鮫に襲われた。

日曜日。小鳥はさえずり歌を歌う。

「み～ど～り　たな～びく～　並盛の～」

どこかで聞いたことあるような、そんな歌。っていうか……

「ヒバード！？」

歩道に影を落とす木の枝に、その愛らしい鳥は止まっていた。ということは近くに…

「君、なにしてんの？」

ヒバリさんっ！

「い、家、いえ、別に何もしてませんけど？」

ユウキはたじろぎながら言った。恐ろしくてしょうがないという固定観念が、ユウキにそうさせる。

「君、確か深水優姫…」

うわっ、ヒバリさんに名前覚えてもらってるよ！
ちょっと嬉しいユウキだった。

「そう、ですけど？」

「そう、別になんでもないよ。早くしないと補習に遅刻するよ」
そう言ってヒバリは去って行ってしまった。

「あ」

ユウキがそう声を上げたのは、例の十字路で京子ちゃんと会ったからである。

「あ、ユウキちゃん。これからみんなで遊びに行くんだけど、一緒にどう？」

ユウキの思考は停止した。

ある晴れた日曜日
『今の時間軸は、ちょうどヴァリアーが来るあたりだ』
『早くしないと補習に遅刻するよ』

『これからみんなで遊びに行くんだけど』

ヴァリアーと、接触……する日か……

ユウキはどうすべきかと悩んだ挙句、一緒に行くことにした。

「アホどもは呼ぶなって言ったのに」
「はひっ！アホって誰のことですか！？」

獄寺とハルちゃんの会話。

「おいツナ。サボった分の勉強は、帰ったらねっちょりやるからな」

リボーンの言葉。

「ねぇ、ツナ兄。僕ゲームセンターに行きたい」
「お、勝負すっか？」
「負けねーぞ、こら」

フゥ太と山本、それに獄寺の会話。

「あれ？」

首をかしげる京子ちゃん。

「どうしたの、京子ちゃん？」

心配するツナ。

「ランボ君がいない」

予想通りの展開。そして――――

ボコンッ

ドキャンッ

バッコーンッ

みんな（京子ちゃんとツナ、ランボ、イーピン無論ユウキも一緒に）で飲み物を飲んでいる時の不思議な効果音。

「何の音だろう？」

京子ちゃんの声と同時に、ツナも気づく。明らかな爆発音。

「な、何！？」

「あー！ツナ君あれ！」

京子ちゃんの指差す方を見ると、そこには空から降るバジルがいた。

ドスンとツナの上に落ちる。

「す、すみません…！！おぬし……」

「十代目」

「ツナさん」

「大丈夫かツナ？」

獄寺や山本、ハル、フゥ太が姿を見せた。ユウキは遠ざかろうとした。だって———

「うお〝ぉい！なんだぁ？外野がぞろぞろと。邪魔するカスはたたっ斬るぞ」

———あーあ、来ちゃったよ。やっぱ京子ちゃんに誘われたとき断っとけばよかったかなぁ…

「な、なんなの一体？」

「嵐の予感だな」

ツナは怯えながら、驚きを口にだし、リボーンは何かを悟っているように言った。

「失せろぉ」

スクアーロがそう言って剣を振り下ろす。その衝撃波だけで土埃が舞い、視界が悪くなっていく。それでもなお、斬撃はやまない。

京子ちゃんたちはリボーンの指示で非難する。ユウキはそれに加わらなかった。そしてそれについて、リボーンは何も言わなかった。

標的9　良く言えばお人好し。悪く言えばただのバカ

「来てください」

額に青い炎をともしたバジルが、ツナの手を引いて埃の中から走り出す。

「ちょ、なんなの？」

明らかに戸惑っているツナは、手を引かれるがままに走った。

「安全なところに！おぬしに伝えたいことが……」

バジルがそう言った。ツナには皆目見当がつかないだろう。

バァンッ

二人の行くてはスクアーロに邪魔され、その場から動けない。

「うお〝ぉい！もう鬼ごっこは終わりにしようや」

スクアーロは二人を睨み付けた。

ユウキはいてもたってもいられなかった。目の前で起きている事件を、自分は収められるかも知れないのにじっとしていることが、辛かった。だから一歩、前に出てしまったのだ。

「こんのカス鮫がぁぁぁぁぁ！！」

突如声を上げたユウキに、一同騒然、いや唖然である。そもそも言葉づかいからして変わったユウキを、どう思っただろうか。

とにもかくにも、スクアーロはユウキに気づき、驚きの声を上げた。

「お前っ、ユウキじゃねぇか！」

銀髪を翻し、ユウキに近寄ってくる。

「うお゛ぉい！お前、こんな所で何してやがんだぁ？」

「うるさい、カス鮫。自分はもうヴァリアー辞めたんです。だからどうでも良いでしょ」

いやいやというようにユウキは返事をした。

ほかの人たちは、ただそんな二人のやり取りを見ているだけ……では無かった。

「こいつら、何モンだぁ？」

スクアーロの言葉の直後、ドカーンッと爆発音がした。獄寺のダ

イナマイトだった。

ロン毛の背後に、山本と獄寺がいた。

「獄寺君、山本！」

ツナが嬉しそうな声を出した。

「持ってきてねぇのに、何故か俺のバットがたてかけてあってな。ハハハハ」

山本が場の雰囲気を読まずして発言した。ユウキはそれを、山本のすごい才能だと思った。

「テメェらも関係あんのかぁ？」

獄寺のダイナマイトをかわし、着地したスクアーロが言った。

「うお〝ぉい。よく分かんねぇが、一つだけ確かなことが……」

スクアーロがそう言いかけた時だった。バジルが叫んだのだ。

「おぬしっ何をする！」

それはスクアーロなんかじゃなくて、ユウキに向けられた言葉だった。

ユウキはバジルの不意を衝いてハーフボンゴレリング（ダミー）の箱を取り上げた。

「カス鮫ェ。こいつ等の目的これなので。もう良いでしょ？」

ユウキはスクアーロに向かってそんなことを言った。

———きっとみんなに恨まれるんだろうな……

「さっさと行きますよ、カス鮫」

「う〝、うお〝おい。しょうがねぇ、今日はこれで終わりにしといてやるぜぇ。じゃあな！」

その場は、嵐が去った後のように静かだった。

「ユウキちゃん？」

「あの女ぁ！」

「深水……」

そんなツナと獄寺、山本の声も、虚しく響くだけだった。

標的１０　幕開け

「で？何故ここにユウキがいるんだい？」

イタリアに戻るなり、金にうるさい赤ん坊が言った。

「日本から連れてきたんだぁ！それよりどこだ、ウチのクソボスはぁ！！」

スクアーロはマーモンに、説明としては足りない言葉を言った後に、別の部屋へ行ってしまった。きっとＸＡＮＸＵＳ（ザンザス）を探しに行ったのだろう。

「で、本当は何でここにいんの？」

今度はベルが尋ねてきた。いつもの不気味な笑顔は変わらない。

「まぁ、日本でいろいろありまして現在に至る」

ユウキは変な口調で喋った。

「ヴァリアー辞めたはずなのに、まさかまたこの隊服を着るとは思いませんでした」

ユウキが今着ている服をつまんでこぼしたその言葉に、ベルとマーモンは素早く反応した。

「辞めた？ボスはそのこと知ってんの？」
「僕らは何も聞いてないよ」

一瞬の沈黙の後、ユウキは口を開いた。

「は？」

絶句。

「え、だって二週間前ここに、『辞めます。探さないでください。ユウキ』って置手紙があったでしょう？」

不安になって、豪華なソファの前にあるテーブルを指差して尋ねたユウキだったが、答えは———

「いいや、見てないね」
「オレも同じく」

えぇ。まったくの予想外でした。

「ん？二週間前と言えば確かレヴィ・ア・タンが……

『ボス、この書類捨ててきます』

レヴィが書類の山を抱き抱え歩き、そしてテーブルにつまづいて書類をばら撒き……

ってことがあったね」

マーモンが冷静にそう言った。そして事実を知ったユウキは叫んだ。

「クソ電気傘ぁぁぁあああああ！！！」

ヴァリアーの屋敷全体に響き渡ったその声は、当然のごとくレヴィの耳にも伝わった。

「誰だ！？今俺の悪口を言った奴は……ってユウキではないか」
突然部屋に飛び込んでくるなり、レヴィは叫びそしてユウキの姿をとらえて驚いていた。
「おまえ、今まで一体どこに……」
「お前のせいだぞレヴィ・アンポン・タンっ！！」
ユウキはレヴィに何の説明もなく怒鳴りつけた。現在の時点でのレヴィの理不尽感は否めない。だが非があるのもまた事実。レヴィ・ア・タン、可哀そうだが仕方がない。ユウキは心の中でそう自己解決して、再びレヴィを怒鳴りつけた。
「馬鹿な電気傘の、バカボラの所為でＸＡＮＸＵＳに怒られるのは自分なんですよ！！！！！」
「バカボラって…そんなこと言われたことがないぞ。第一、言っている意味が解らん！！」
「うっさい、バカ」
「なに？バカという方がバカなんだ」
「そんなの子供だましだ！！バカはバカでつまりお前がバカなんだぁぁあ！！」

「うるせー、ドカス共」

部屋に響いたその声は、一瞬でその場を黙らせた。相変わらずその声の主は、鋭い視線を投げ、不機嫌そうな顔をしている。ユウキが最後に見た二週間前と変わっていなかった。

「ＸＡＮＸＵＳ……」

ユウキのその声に反応して、ＸＡＮＸＵＳは一瞬ユウキを見たが、すぐに視線を全員に向けた。

「ボス、どうしたんだい？」

マーモンが言った。フードに隠れて表情は分からないが、声でマーモンがＸＡＮＸＵＳを敬愛していると分かる。ユウキは二年間ここで生活を共にし、知ったことがある。

実は幹部の全員がＸＡＮＸＵＳを畏怖し、憧れ、そして敬っている。

それぞれに、ＸＡＮＸＵＳに対しての深いつながりがある。そして、それを片手で持て余すような人間なのだ。ＸＡＮＸＵＳという男は。それだけの実力を、彼は持っている。

って、自分すっかりこの世界に慣れてきてしまっている！！

過去と完全になじんでしまっていることにユウキは、内心ビクビクしていた。

人間の順応力って恐ろしい、と。

「ししし、マーモン。スクアーロが持ってるやつ見てみろよ」

ベルがそう言った後、マーモンはすぐに理解したようだ。

「ボンゴレリングが、そろったね」

標的１１　心残りとわだかまり

一方その頃の並盛町では……

「本物のリングがここに！？じゃあ、さっきのは……」

バジルが寝ている病室で、ツナは驚きを隠さなかった。優姫とあのロン毛が持っていったものが今ここにあって、つまりあれは偽物で…という変換さえ難しいように思われた。あの時は、そんな状況じゃなかったのだ。

「さっさと行きますよ、カス鮫」

「う〝、うお〝おい。しょうがねぇ、今日はこれで終わりにしといてやるぜぇ。じゃあな！」

ただ、呆然と見送ることしかできなかった。

「ユウキちゃん？」

「あの女ぁ！」

「深水……」

ツナはただ信じられない、というように声を出した。獄寺や山本

にもそれぞれに思いはあったことだろう。しかし、ツナはただ優姫の裏切りを『信じられない』という気持ちで声を出したのだ。まだ会って一週間もしないはずなのに、そこまで信頼できると思っていた。なぜかは知らないが、優姫のあの行動には何か理由があったのだ、としか捉えられなかった。

「大丈夫か！？」

そこに飛び込んできたのはディーノの声だった。部下を引き連れてこちらに向かってくる。

「深追いは禁物だぞ」

今にも走り出しそうな獄寺や山本、怪我がひどいバジルに向かってリボーンは言った。

「り、リボーン！何で今頃出てくんだよ！」

ツナはリボーンを問い詰めた。もっと早く来てくれていれば、ユウキがあんなことする必要はなかったのに。そんな気持ちが芽生えていた。かなり突飛な考えだけど、確信があった。ユウキは自分たちを助けてくれた、と。

「オレは、奴に攻撃しちゃいけないことになってるからな。どうせ助けられなかったんだ」

「なんでだよ！？」

「奴も、ボンゴレファミリーだからだ」

リボーンは冷静に返した。

「えぇーーー！俺、ボンゴレの人にやられそうになったの！？どういうことだよ！！」

驚愕の事実。そしてきちんと理解してみると、ユウキもボンゴレの一人ということだと分かる。

ユウキがこのことを、ツナたちが十代目と名乗るファミリーだと知っていただろうか。知っていて、黙っていたのだろうか。本当に、ユウキはツナたちの敵なのだろうか。

ツナの頭の中は、そんな考えがぐるぐるとまわっているだけだった。

「お前ら、帰って良いぞ」

リボーンが山本と獄寺にそう告げた。二人がユウキとロン毛を探そうとしていた時だった。

「さっきの戦いで、分かっただろ。今のお前らの戦闘レベルじゃ、かえって足手まといになるだけだ」

なんて冷たい言葉だろうか。山本も獄寺も、身体に受けたダメー

ジよりも精神的ダメージの方が遥かに大きかった。そしてその傷をえぐるリボーンの一言。山本と獄寺の受けたダメージは、普通の人間ならば再起不能なほどにその体を蝕んだだろう。もう、無理だとあきらめたことだろう。そして、山本と獄寺はその場に立ち尽くしていた。それしかできないのだ。

「リボーン、何言ってんだよ！？」

そのツナのフォローは、その場には似つかわしくなく、空気は虚しく、暗く澱んでいた。

「いくぞ、ツナ」

リボーンは聞く耳持たずで、ツナを引きずって行った。

「おい、リボーン！」

ツナはしびれを切らしたように言った。リボーンの、山本たちへの言葉が許せないのだ。

「本当は、アイツらも感じているはずだ。あれだけ一方的に攻撃されて、挙句ユウキに手を出されたんだ。腸煮（はらわた）えくりかえってねぇわけがねぇ」

リボーンの言葉で、ツナは思い出した。あの二人が、どんな顔でユウキたちを見ていたか。

「今は、放っておけ」

そんなこと言われても、気になるものは気になるツナだった。

標的１２　レイの憂鬱、そして苦悩

「……ユウキは、どこに行ったんだ？」

並盛に似合わぬ絢爛豪華なお屋敷に、ぽつんと佇む男が一人。ちなみにうるさい他の二匹は天界に置いてきた。

『神なのにそんなことも知らないなんて……ぷっ』

『ま、マヌケなのです～ギャハハハ』

突如そんな声がレイの耳に響く。まったく。鬱陶しいから置いてきたというのに、回線を勝手につないだらしい。かえってうるさい。

「…うるさいぞお前ら。勝手に神のパソコンを使うな。ウイルスに感染したらどうしてくれる」

レイは一応言葉にしてみるが、傍からだときっと、独り言を呟いてるようにしか見えないだろう。まぁ、周りに人はいない……が？

妙な気配を感じる。誰かが居るような……

「……誰だ？」

レイは姿の見えぬ誰かに告げた。思ったよりも鋭い声になってしまった。

「オレの気配に気づくとは、なかなかだな」

すごく派手なソファーの後ろから出てきたのは、ダークスーツを身に纏い、同じ色のハットにカメレオンを乗せ、黄色いおしゃぶりを首にさげてる赤ん坊。どこからどう見てもリボーンである。

「……」

しばらくの間、互いに見合ったまま、レイもリボーンも黙っていた。

最初に口を開いたのは、レイだった。
「何故、この家に入ってきた？」
「…オレが誰かは、聞かねーのか？」
リボーンはさして驚いた風もなく聞き返してきた。
「あぁ。”呪われし赤ん坊（アルコバレーノ）”それ位は知っている。俺が知りたいのは何故お前がここに来たか、だ」
レイも落ち着いて、淡々と答える。
「お前、何モンだ？」
「質問してるのはこっちだ、アルコバレーノ」
お互いに腹の探り合い。

「……ここは深水優姫の家で、間違いないか？」

最初に折れたのはリボーンだった。さしあたりそれが一番の目的で来たのだろう。そんなにもユウキが気になるだろうか。

――確かに、気にはなるか

レイは一切ユウキについての情報を隠していない。調べれば、すぐに分かるのだ。だが、知られるのが異様に早い。気づかれるのは、ヴァリアーが来てからだと……

レイはいきなり、壁にかけてある、明らかにゴージャスなこの部屋に似つかわしくない日めくりカレンダーを見た。日付は１０月１１日。そして思い出す。最後にあのカレンダーをめくったのはいつだっただろうか。確か――

ユウキを転生させた日だった。すると、つまりあのカレンダーは、金曜から何も変わっていないことになる。金曜の夜ユウキと別れ、土曜は野暮用、そして今日――。つまり今日は１０月１３日である。ちょうど、スクアーロが並盛町に来てツナたちと接触する日か。なるほど、それならレイにも納得できた。さしずめユウキが何かやらかしたのだろう。

無論この推理は九割九分九厘当たっているが、一つだけ違うことがある。リボーンが深水優姫を知ったのは、もっと前のことだった。

「…確かに、ユウキの家で間違いない。ところで———そのユウキはどこに行ったか知っているか？」

リボーンがピクッと動いた。何か知っている。

「……ヴァリアーと共に、イタリアに行っちまった」

「え？」

聞き捨てならない。いや、真実であってほしくない言葉を聞いた気がした。

レイは後悔した。

一人で行動するな

そうユウキに伝えなかったことを。そして――――

「お前…初代フェデルタリング保持者じゃねーか？肖像画で見たことあるだけだが…」

あの時、肖像画を燃やさなかったことを。

標的１３　真実は今、語られようとしていた

ワンス・アポン・ア・タイム。

イタリアで一人の青年が立ち上げた自警団には、七つのリングがありました。青年はその≪大空≫のリングの適応者でした。彼は仲間に他の六つのリングを与えました。リングにはそれぞれ属性がありました。≪嵐≫≪雨≫≪雲≫≪晴≫≪霧≫≪雷≫――その属性はその人物そのものを表現していたと言っても過言ではありませんでした。

そしてそれ以外に二つの属性、二つのリングがありました。≪闇≫≪光≫の忠実（フェデルタリング）な指輪です。しかし自警団の中には、いや、青年の知り合いの中には、そのリングを使いこなせるほどの人間はいませんでした。仕方なく青年は、そのリングを大事にしまっておきました。

ある日のことです。青年は当時町を脅かしていたマフィアに取り囲まれるというピンチに陥りました。彼の仲間はその時、別の場所にいたのです。青年は一人でした。青年は、四方を取り囲まれながらも敢闘しました。しかし、さすがの彼も一人では歯が立ちませんでした。そこに現れたのは、彼と同い年くらいの青年二人でした。彼らは青年に近づいていきました。それを邪魔する者は次々と倒されてしまいました。彼らが青年にたどり着いた時には、敵はほとんど逃げていました。

『ありがとう』

青年はそう礼を告げました。すると彼らはこう言いました。

『俺たちも、あなたの仲間（ファミリー）に入れてください』

青年はそれを快く承諾しました。そして、フェデルタリングを授けました。彼らはそれを使いこなして、青年をサポートしました。

ある日、青年の自警団は“ボンゴレファミリー”という大きなマフィア組織になりました。青年はその初代ボスとなり、本名ではなく一世（プリーモ）と呼ばれることが多くなりました。

ある日プリーモは、リングを持つもの、“守護者”の一人に裏切られました。

プリーモはボンゴレファミリーボスの座を辞し、リングを二世（セコーンド）に継承し、日本に渡りました。

沢田家康と改名したボンゴレ一世は、余生を穏やかに過ごしました。

リングの守護者たちもリングを継承し、散り散りになりました。

初代以降、フェデルタリングの守護者は現れませんでした。

「フェデルタリングの存在はは秘密にされていたが…アルコバレーノなら知っているだろう？」

レイは目の前にした赤ん坊に、そう言った。そして続ける。

「俺は、初代フェデルタリング≪光≫の守護者だった」

その言葉を聞いた時、リボーンはわずかに反応した。レイはリボ

ーンに嘘をつくつもりはなかった。

「俺が何故ここにいるか……それを話すと長くなるが、聞くか？」

レイはリボーンを試すように質問した。リボーンはしばらく悩んで、うなずいた。

「……そこに座りな」

レイはずっと立ちっぱなしのリボーンに対してソファーを指差し、そして自分はその反対側の椅子に座りながら言った。

窓の外の月は、煌々としていた。

標的１４　本当に、ヴァリアー来る！

――――そろそろ、みんなの修業が始まる頃か……

ユウキは黒い隊服に身を包みながら、気だるそうにこの何日間を過ごしていた。

ＸＡＮＸＵＳは別段ユウキに何かしてくることはなく、ただ指輪を手にしてからは何事もなく淡々と過ごしている。そして、そろそろのはずだ。あのリングが偽物（フェイク）だと気づくのは。

「偽物（フェイク）だ」

ＸＡＮＸＵＳがそう気づいたのは、やはり今日だった。

「そろいましたＸＡＮＸＵＳ様。晴・雨・嵐・雷・霧・雲……」

「ハーフボンゴレリングを持つ６人の守護者が」

「うるせぇよ」

ＸＡＮＸＵＳはそう言った。

ヴァリアー暗殺部隊はその日、イタリアを後にした。

「そういえば、ユウキ。そのリングは何だい？」

日本に向かう途中、マーモンに問われた。ユウキの指に光る二つのリングのことだ。ユウキは正直に答えた。

「これは忠実（フェデルタリング）な指輪です」

「フェデルタリング……」

この時のマーモンの反応が、ユウキには少し気になった。しかし、ユウキはそれを追求しなかった。

時は１０月１８日――――並盛町。

「この街に……ハーフボンゴレリングが」
「スクアーロが嘘をついてなければ、間違いないね」

あるビルの上、二つの人影。

「マーモン、粘写を頼めるか？」

片方はいかつい男。背中には八本の電気傘（パラボラ）。

「非常事態だもの、仕方ないね。つけにしておいてあげるよ、レヴィ・ア・タン」

マーモンと呼ばれた方は非常に小さい、赤ん坊のようなものだった。無論、流暢（りゅうちょう）に喋っているのが不思議なほどだ。

「レヴィ、君のリングは確か…」
「雷だ」
「うむ。じゃあもう片方の雷のリングを探せばいいわけだ」
マーモンが自分の背の方から紙を用意する。そして―――

「……いつ見ても汚いな…」
レヴィはあきれた感じでマーモンに言った。しかしマーモンはそんなこと気にしなかった。
「む。近いよ。南に２０５ｍ、西に８０１ｍの地点だ」

「これよりヴァリアー・レヴィ雷撃隊、雷のリングの奪還に向かう」
レヴィのその声と共に、彼の部下３人は立ち上がった。
「リングの所持者及び邪魔する奴は―――」

「消せ」

その言葉と共に、レヴィとその部下たちはビルの上から飛び出した。

「招いてない客が思ったより早く来ちまったらしい」

父の言葉を、一人理解できていないツナだった。

「本当か、家光」

リボーンの言葉を聞いても

「本国にいるオレの影からの情報だ。まちがいない」

「にしても早すぎるぞ」

父とリボーンの会話を聞いても

「ニセのリングがこうも早く見破られるとは想定外だった。考えられるとすればザンザスの超直感……」

リングという単語を聞いても、いまいち理解できなかった。だが、次の言葉ですべてを理解した。

「ヴァリアーが日本に上陸したらしい」

「なっ！例のおっかない連中が――――！？？……！つーか？何で？父さんが…！？」

「オレは守護者全員の安全の確認を兼ね状況を伝えにいく。手伝えバジル」

「はいっ」

ツナの驚きは無視され、疑問も無視され話は進んだ。しかし次の瞬間、ツナは今度こそすべてを知った。

「お供します親方様！」

バジルのその言葉は、父に向けられていた。

「ええ！？」

ツナは驚きの声を上げ、わなわなとしながらバジルに問いかける。

「おやかたさま……？」

「はい」

元気な返事が返ってくる。次は父を呼び止める。

「……父さん？」

「なんだ？」

父は笑顔だ。

「親方様？」

「親方様」

父は自分を指差し、満面の笑みでそう言った。

「うそ――――――！？」

ツナは驚愕の事実を知った。

標的15　久しぶりのユウキはＫＹです

レヴィの部下、０１（ウーノ）、０２（デューエ）、０３（トレ）が、ツナの守護者によって倒れていく。

「み…みんな…！！」

ツナが喜びの声を上げる。

「家光の奴、何とか間に合ったみてーだな」

リボーンも一安心、というように言った。

「みんなーっ！！」

ツナがみんなのもとへ駆け寄っていく。

「１０代目！！」

「なんか久しぶりだな」

「オス！」

獄寺、山本、了平が次々に口にして、

「ツナ兄ー、怖かったよーっ」

フゥ太、ランボ、イーピンがツナに近づいていく。

「本当に恐ぇのは…！！くるぞ…！」

ツナたちがお互いに安堵し合っている時に、リボーンが何かを感じ取った。

「……お前達がやったのか」

いやに図体がでかいのが現れた。レヴィ・ア・タンだ。

「雷のリングを持つオレの相手は、パーマのガキだな」

レヴィはランボを睨みながら言った。

ツナたちは、口を開くことすらできなかった。

「邪魔立てすれば消す」

それでもレヴィが背中のパラボラに手を伸ばすと、獄寺、山本、了平は、身構えた。ツナは途方に暮れるばかりだった。

「待てェレヴィ！」

その声と共に、レヴィの後ろから複数の人間が現れた。

「一人で狩っちゃだめよ」

「他のリング保持者もそこにいるみたいなんだ」

黒服の集団の中に、リボーンは何か感じるものがあったようだ。しかしツナは緊張感なく慌てふためいていた。

「うわわわ……こ…こんなに……！」

「うお〝ぉい！！！」

一際大きい声があたりに響いた。ツナたちも聞いたことがある声だった。

「よくもだましてくれたなぁ、カスども！」

「で…でた――――っ」
「！」
「あんにゃろう」

S・スクアーロの姿に、ツナはともかく、山本、獄寺には心疼くものがあったに違いない。

「雨のリングを持つのはどいつだぁ？」

スクアーロのうるさい声に、山本は静かに前に出た。

「オレだ」

「なんだぁ、てめーか。3秒だ。3秒でおろしてやる」

その時、スクアーロの肩をつかみ前へ出る者がいた。

「のけ」

「のけっ」

レヴィはそれを真似してスクアーロより前に出た。スクアーロに何か文句を言われているが、そんなことはどうでも良い。最初に前に出た人物、それこそがヴァリアーのボスであるＸＡＮＸＵＳである。

「でたな…まさかまた奴を見る日が来るとはな。ＸＡＮＸＵＳ」

「ひっ」

ツナはＸＡＮＸＵＳの迫力に気おされていた。

「お久しぶりです」

その時一番空気を読んでいない声が響いた。ユウキだった。

「ボス、手ぇ出さないでください。そろそろ門外顧問が来ますから」

無論ユウキはヴァリアーの黒い隊服を着ていたが、立ち位置はツナたちの方だった。

「おま、深水！！」

一番に獄寺が口を開いたが、その場の全員がユウキを何とも言えぬ表情で見ていた。しかしリボーンだけは違った。表情からは分かりにくいがすべてを悟っているような感じだった。

「お前ら、ここからはオレが取り仕切らせてもらう」

野太い声が響いた。ツナの父親、並びに門外顧問チームである。

「と……父さん！！？」

ツナが驚きで声を上げ、獄寺はそれに驚いていた。

「なっ１０代目のお父様！！」

「家光…！」

ＸＡＮＸＵＳは多少驚いているようだが、表情にはあまり出さなかった。一方…

「て…てめー何しに…」

スクアーロは警戒し、剣を構えた。しかし家光はそれにひるまず、ＸＡＮＸＵＳと同じくらい落ち着いた様子でこう告げた。

「ＸＡＮＸＵＳ。お前の部下は門外顧問であるこのオレに剣を向けるのか」

ＸＡＮＸＵＳは忌々しげに家光を睨み、家光もまたそれに負けないくらい強い殺気を放っている。

「二人ともー、真剣に見つめあっている所悪いのですが、話を進めて頂けますかー？」

緊張感も何もない声がその場の空気を変えた。もちろんこの声の主はユウキである。

「…あぁ、それでは、本題に入る。オレが送った異議申し立ての質問状の回答ととれる勅命が、今届いた」

家光は、再び空気を緊張で包み、紙を差し出しながらそう言った。

その言葉の直後、リボーンがツナに門外顧問の説明を始めた。その間は、その場の誰も邪魔をしなかった。

標的１６　久しぶりに会ったレイに怒鳴られました（前書き）

初めまして。作者です。

今回は少し、長めになってしまいました。

それでも、最後まで読んでいただけることを期待しています。

と言いますか、読んでいただけると、かなり、超絶に作者が喜びます。

標的１６　久しぶりに会ったレイに怒鳴られました

「沢田殿、これが９代目からの勅命です」

ツナはバジルからそれを受け取った。ＸＡＮＸＵＳもまた、勅命を受け取っていた。

９代目の死炎印があることで、それは本物と証明された。イタリア語で書いてあり、それを読めないツナのために家光が読み上げる。

『今まで自分は、後継者にふさわしいのは家光の息子である沢田綱吉だと考えて、そのように仕向けてきた。だが最近、死期が近いせいか私の直感は冴えわたり、他によりふさわしい後継者を見つけるに至った。我が息子、ＸＡＮＸＵＳである。彼こそが真に１０代目にふさわしい』

「あの人９代目の息子なの？」

ツナの疑問は、誰にも答えられることなくスルーされた。

『だが、この変更に不服な者もいるだろう。現に家光はＸＡＮＸＵＳへのリングの継承を拒んだ』

この時ツナは、自分の父親を心の底から恨んだ。

『かといって私は、ファミリー同士の無益な抗争に突入することを望まない。そこで、皆が納得するボンゴレ公認の決闘をここに開始する』

家光は勅命を読み終わり、そして最後にこう言った。

「……つまり、こーいうこった……

同じ種類のリングを持つ者同士の1対1のガチンコ勝負(バトル)だ」

ツナが次の朝起きると、9代目からの勅命が額に入っていたとか

いないとか。まぁ、今のユウキにはどうでも良かった。家に帰るなり、レイに怒られてしまった。お説教3時間コースだった。

昨日はあの後――――

「同じ種類のリングを持つ者同士の1対1のガチンコ勝負(バトル)ーーー！！？」

ツナの絶叫がおさまるまで、少し長い時間が経った。

「ああ。あとは指示を待てと書いてある」

家光がそう告げると、間を開けずに二人の女が現れた。

「お待たせしました」

顔をマスクで覆っていて表情が解らない。しかも、二人とも同じような容姿をしている。

「今回のリング争奪戦では、我々が審判（ジャッジ）をつとめます」

声も事務的で何とも感情がない機械のようである。

「我々は9代目直属のチェルベッロ機関の者です。リング争奪戦において我々の決定は、9代目の決定だと思ってください」

誰も何も言わなかった。

「9代目は、これがファミリー全体を納得させるためのギリギリの措置だとおっしゃっています。異存はありませんか、XANXUS様」

「……」

XANXUSは何も言わなかった。

「ありがとうございます」

チェルベッロはそれを肯定だと受け取ったらしい。しかし、異議を唱える者がいた。

「待て、異議ありだ。チェルベッロ機関など聞いたことがないぞ。そんな連中にジャッジをまかせられるか」

家光がそう言った。チェルベッロはぴしゃりと言い放った。

「異議は認められません。我々は9代目に仕えているのであり、あなたの力の及ぶ存在ではない」

家光は押し黙った。しかし、ユウキが静かに見つめると、家光は口を開き一層大きな声を出した。

「ならば、もう一人審判(ジャッジ)をつけてもらおう。ユウキ」

家光はユウキを示した。

「な…ユウキが!?」
「え? ユウキちゃん?」
「……」

その場の全員が、驚きを隠せなかった。しかし、チェルベッロは表情は変えず話し始めた。

「それは認められません。これはあくまでも9代目の意思のもとで……」

「異議あり」

ユウキが落ち着いてそう言った。

「このリング争奪戦とは、いわば9代目の決定、門外顧問の決定、どちらが正しいかを形で表すものであり、9代目の意思によって始まった決闘であっても、9代目、門外顧問は対等であるべきです」

チェルベッロは何も言ってこなかった。しかし、ユウキは疑いを払しょくするため、最後のだめ押しをした。

「自分は、フェデルタリング保持者です」

その一言に、その場の全員が理解する力があったとは思えないが、少なくともチェルベッロを納得させるには十分だった。

「…では、深水優姫を門外顧問よりの審判(ジャッジ)として認めます」

その場の、ツナたちの緊張が少し和らいだ気がした。

そしてとうとう、チェルベッロからこの言葉が発せられた。

「真にリングにふさわしいのはどちらなのか、命をかけて証明してもらいます。場所は深夜の並盛中学校。詳しくは追って説明します」

「え！？並中でやんの！！？」

「それでは明晩１１時、並盛中でお待ちしています。さようなら」

ツナのその質問を無視して、というか、今のはツナの事実確認だろう。その言葉を無視して、チェルベッロは去って行った。

ヴァリアーは、ユウキについて納得していないような雰囲気で去って行った。

ツナはその去り際のＸＡＮＸＵＳの様子に、腰を抜かしてしまった。

「……何で…」

レイは小さな声で、何かを我慢しているように肩を震わせながら言った。

「何？」

ユウキは聞き返した。

「何で、お前が審判（ジャッジ）なんだぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

レイの怒号は、広い家じゅうに響き渡った。

標的１７　堕ち神の真実（前書き）

こ、今回も長く…なって……ｏｒｚ

掲載に長い時間かけた上に、長くなってしまった。
つまりまとめられなかった……です（´・ω・｀）ショボーン

それでも、最後まで読んでいただけたら、そして―――

ご感想などをいただけると、作者は月まで飛び跳ねるほど喜びます。
でわ。

作者より

標的１７　堕ち神の真実

時は進み夜――――

並盛中学校では、リング争奪戦に向けての準備は整い、今まさに晴の守護者同士の戦いが始まろうとしていた。ユウキはもちろん学校を休んでいたが、ツナたちの心配は今のところ必要ないと思う。原作通りに進めば、だが。

「みなさん、こんばんは」

少し低めの心地いい声が響いた。ユウキやその場の全員が、声の主に注目した。そこにいたのは――――

「矢野、拓麻くん……だっけ？」

最初に口を開いたのはユウキだった。ツナもその名前に気づいたようだ。

「矢野君って確か…同じクラスの……」

しかし、あまり記憶にはなさそうな反応だ。確かに彼は地味だった。いつもクラスの端で本を読んでいるような、おとなしい雰囲気の人間だ。しかし今は皆の注目を集めている。黒い服に…黒いヴァリアーの隊服に身を包み、不敵の笑みを浮かべている。

「タクマか……今までどこにいたんだぁ？」

スクアーロが怒鳴りながら尋ねた。どうやらあの隊服は本物らしい。だがユウキは知らなかった。彼がヴァリアーの一員だなんて。

『ヴァリアーが来るあたりだ。そして、その中に堕ち神がいる』

不意にレイの言葉を思い出した。もしかしたら、彼が堕ち神かも知れない。いや、その可能性が一番高いだろう。既存のキャラに、そんな変更が出来るかも分からないし。

「スクアーロ、彼はヴァリアーの一員ですか？いつから？」

ユウキは、スクアーロに尋ねる。感情には、疑念には気づかれないように。

「ん？あぁ、確か……お前が姿をくらましてからすぐの頃だったような…」

いきなり話しかけられたスクアーロが、少し戸惑った後、普通に答えた。他には何も言ってこない所を見ると、ユウキが審判（ジャッジ）を務めることには納得しているのだろう。まぁ、「気にしないでください」的な内容の手紙も書き置いたからだろうが。

「やあ、ユウキ」

タクマが馴れ馴れしく話しかけてくる。ユウキは反射的に身構えていた。不信感丸出しなのは百も承知である。しかし、身体が反応してしまった。ユウキの意思に反してである。

ユウキ、そいつ大当（ビンゴ）たり。堕ち神だ。

頭の中にその声が響いてきた。タクマと似ている心地の良いハスキーボイス。やや低めなのは、レイの歳のせいだろうか。だがユウキにはとても聞きやすい声だった。

ここじゃまずい。一先ずどこか人目のない場所へ行け。

ユウキは姿の見えない声の主に、軽く頷き、チェルベッロに向かって言う。

「早く試合を始めてください。そろそろ眠いです」

わざとらしく欠伸をして見せる。チェルベッロは何も答えずに、コールした。

「では晴のリング、ルッスーリアＶＳ笹川了平。勝負開始（バトル）！！」

チェルベッロがそう宣言したと同時に、ユウキはタクマのところに向かった。

「……タクマ、で良いですか？少し話しがあります」

ユウキは少し高圧的に話しかけた。タクマの方は待ってましたとでも言うようにニッと笑い、黙ってついてきた。

「単刀直入に言います。あなたは堕ち神ですね？」

ユウキは少し緊張していた。正直言うと、あまり堕ち神のことを

知らなかった。もちろんレイはうるさいほど説明してくれたが、あーだこーだと余計な話まで加わってきて、結局理解できずに説明は終了してしまったのである。

「ああ、そうだけど？」

あっけなく答えられた。さも「当たり前じゃないか」と言うように、いとも簡単に。ユウキが呆気にとられていると、タクマがフッと笑って近づいてきた。

「君は、？堕ち神？ってそんなに簡単に口にするけど……」

手を伸ばせば届く距離で、彼は止まった。ユウキは警戒することも忘れ、彼の言葉を聞く。

「堕ち神がどうやって生まれるか、知ってる？」

タクマがそう言った瞬間、風が吹きユウキとタクマの髪を揺らす。彼はユウキのことを、真剣に見つめていた。そして黙っているユウキを見て、さらに続けた。

「それは――――」

彼の口は動いていた。それでもその瞬間、すべての音が消えたようにユウキは無に包まれた。

でもユウキは理解した。彼の言った言葉を。

『それは、神に魅入られた人間が神に捨てられた時に生まれるんだ』

標的１８　信ずるものとは

「堕ち神は、人間――――？」

ユウキの問いは、一体誰に向けられたものだろう。目の前のタクマか、何も言わないレイか――――

「頭の良いユウキなら、気づいてるかな？“神に魅入られた人間”のこと」

ユウキはハッとした。タクマの瞳が嗤(わら)っていた。さっき、タクマの言葉を聞いた時から薄々思っていたことがある。神に魅入られた人間――それは、つまり……

ユウキは何も言わずに、眼帯を外した。レイはすぐさま姿を現した。レイはユウキに背を向け、ただ一言「ゴメン」とだけ呟いた。

何も言わなくてゴメン、と。

「やぁ、レイ。久しぶりだね」

タクマが馴れ馴れしくレイに話しかけた。

「…あぁ、そうだな」

レイも素っ気ないがそれに返事をする。

「どういうことです？二人はお知り合いですか？」

ユウキが訊いた。ここで思い知らされた。ユウキは尋ねてばかりだ。何にも、知らないのだ。レイのこともタクマのことも、神のことも堕ち神のことも。自分でも馬鹿だと思う。それでよく、堕ち神を倒すなどと言えたものだ。

「聞いてないんだ、ユウキは。昔レイが――――」

「ヤメロっ！！」

タクマの言葉をレイの怒号が遮った。いつになく、大きな声だった。

この声で、ユウキの心は傷ついた。その傷ついた理由は、ユウキにもよく分からない。レイの隠しごとか、それをタクマが知っていることか、それを問いただせない自分の心か――――

ユウキが何も言わずに、黙って俯いているとタクマは、

「じゃあね、ユウキ。僕はそれを言いに来ただけだから」

そう言ってタクマはユウキの横を通りすがり、そしてユウキの頭をポンと叩きながらユウキにしか聞こえないくらいの声で「気が向いたら僕を呼んでよ」と言い残して消えた。

「……アイツ、この世界から消えたみたいだ」

レイがそう言った。タクマが去ってから長い時間は経っていなかった。そしてそれは同時に、ユウキが傷ついてから間もないということである。

「すいません、今は何も聞きたくないです」

そう言ってユウキは眼帯を戻す。それと同時にレイの姿は消え、ユウキも晴のフィールドへ戻る。

戻った時は、丁度了平が「極限太陽（マキシマムキャノン）」を放ったところだった。

結果、ルッスーリアのメタル・ニーは砕かれ、ゴーラ・モスカが彼を打ち、了平の勝利となった。

「異議はありますか、深水優姫」

チェルベッロは了平の勝利を宣言してから、ユウキに確認してきた。無論ユウキに異論はない。

「いいえ」

事務的な声でユウキは答えた。それは他の人には変な風に映ったかもしれないが、そんなこと気にしている余裕はなかった。

「明日の対戦は、雷の守護者同士の対決です」

ツナたちに衝撃が走った瞬間だった。

標的１９　無いものねだりは、しないはず

「ということで、今夜はお世話になります」

ユウキがツナの母に深々と頭を下げる。外面は良い方だから大抵は快く受け入れられるが、今回も上手くいった。

「あらぁ、ツナのお友達？もう、びっくりしたわ。さ、上がって？」

ツナの母が玄関を閉め、ユウキを急かす。母親ってこういうものなのか、と少し涙腺がゆるみそうになった。

「で、なんでオレ達こんな豪邸（悪趣味）にいるわけ！？」

ツナはリボーンに向かって叫んだ。このお屋敷がユウキの家だと聞いた時にはびっくりだったが、当の本人はここにはいなかった。

「合宿だ」

さらっと言ってのけるリボーンは山本の肩に乗って笑っている。その場には他にも獄寺、了平、ランボと、見たことのない男がいた。リボーン曰く「ユウキの兄貴」らしいが、真っ黒な髪と瞳、顔立ちも日本人そのものだった。少し外国人風味のユウキとは、似ても似つかない。

「あの、レイさん？何でここで合宿なんですか？」

ユウキの兄と名乗るこの男が、争奪戦のこと、ボンゴレのこと、ヴァリアーのこと、マフィアのこと。どこまで分かっているのか知らないので、ツナは一応訊いてみる。するとあっさり、

「え？明日の雷の守護者戦や、これからの戦いに備えてだろう？」

妙に整った笑顔で返された。ユウキ本人がここにいないので、それ以上は何も訊かなかった。

「それにしても大変ね。真夜中の相撲大会だったかしら？その合宿にわざわざユウキちゃんの家を貸してくれるなんて、ホントにありがとね」

ツナの母親、沢田奈々はユウキにバスタオルを渡しながらそう言った。

「いえ、全然。それに今ちょっとケンカ中で……」

笑顔で返すこともできずに、ユウキは俯いた。実際レイと会いたくないのは確かだが、本当にケンカなのかと問われればはっきりと「そうだ」とは答えられない。ユウキは自分が何に腹を立てて、機嫌を損ねているのか分からなかった。

そんな様子のユウキに奈々は、

「……お風呂にゆっくりと浸かって、体を温めて。そして出てきたら一緒に、少しお話しましょ？」

優しい微笑みは、ユウキの知らないモノだった。もとより自分に笑いかけてくれる者が少なかったが、それでもその微笑みは絶対にユウキの手に入らないものだと知っていた。

両親のいないユウキには、到底手の届かないモノだった。

「ありがとう、ございます……」

ユウキはそう言い残して、教えられた風呂場に向かう。戸を閉めた途端、涙が溢れてきた。ユウキはその場にしゃがみ込み、少しの間だけ嗚咽を漏らして泣いた。

「そうだね。ユウキはそろそろ堕ちるかも知れない。迎えに来る？」

『いいや、俺は行かないよ。お前達が今のところ一番近くにいるだろう？連れて来いよ』

いやに命令口調な電話の相手は、あまり好きじゃなかった。しかしその命令に、背くことはできない。もう後戻りはできないのだ。あの時から――――

『堕ちる前に連れて来いよ？俺が堕としてやるから』

「……仰せのままに。我が主人（マイ・ロード）」

そう言って電話を切った。

「何だってー？」

まだ幼い相棒が尋ねてきた。もちろんそのままを話す。

「ユウキを連れて来いとさ。人使いが荒いよね、まったく」

えー、別にぃー、と相棒はぼやくが、どうでも良い。

「まぁこれで、アイツも知るんじゃないかな？自分の愚かさに」

「うわ、その笑顔こっわ～。ま、あんたらしいっちゃらしいけど」

相棒に揶揄されたのは、紛れもない自分の微笑みだった。

標的２０　歪んだ過去

ユウキの幼い頃に、両親は亡くなったらしい。

理由は知らない。むしろ両親を知らない。

ユウキは小さい頃から祖父母の家で育ち、両親の顔すら知らなかった。写真も一枚も残っていなかった。

「ワタシのお父さんとお母さんは、どこにいるの？」

一度祖母に訊いたことがあるが、何も教えてくれなかった。しかし一度だけ、母の顔を見たことがある。

祖母がその写真を見て、泣いていたのを覚えている。

「ユウキ、お前の父さんはね、殺されたんだよ。お前の母さんに」

祖父が死ぬ間際、そう言った。ユウキが小学生の時だった。

語られた真実は小学生にはあまりに残酷だった。

その日からユウキは心を閉ざした。自分を守るように、その心の

中に『自分』を押し込めた。

ユウキの一人称はワタシから自分に変わった。いつも敬語でいるのは、無駄に周りの人間と馴れ合わない為だった。

そうすれば、誰かに傷つけられることもなく、誰かを傷つけることもない。

ユウキが中学に進学した頃に祖母が倒れた。それから祖母は、ずっと入院していた。病名は覚えていない。ただもう手遅れだと言われたことだけは覚えている。

祖母はそれまでの記憶も曖昧になり、ユウキを孫と認識するのも無理だった。それでも祖母の大切にしていた写真を持っていくと、それを見ながらポロポロ涙を流していた。

祖母が死んだのは中一の秋だった。

ユウキはそれまで住んでいた家に、一人で住むことになった。本当は親戚に預けられるはずだったが、引き取り手は誰もいなかった。

一人で住むには広すぎる家で、ユウキは時々泣いた。

祖父母の遺品を見ては、泣いた。

そこにはユウキの両親の思い出の品がいっぱいだった。

小学校の卒業アルバム、中学校の卒業証書、全部全部――――両親の物がそろっていた。

それで初めて、母の名前が深水カミラということを知った。外国人だということも。

父の名前は深水怜（れい）だった。

二人とも祖父母に引き取られた孤児だった。

母の日記もあったが、読んでも意味は分からなかった。ユウキを産んだあたりから、狂ってしまったようだった。そして最後に記されていたのは「ころしてやる」の文字だった。

ユウキはいつの間にか湯船の中で眠ってしまっていた。縁によっかかっていたので溺れることはないだろうが、体が火照って熱すぎる。やばいのぼせた、と思ったときはすでに遅かった。だが倒れるまでではなかったので、シャワーの冷水を浴びながら熱を持った体を冷ます。嫌なことを思い出してしまったのもあって気分が悪くなってしまった。ユウキはそのまま風呂場から出た。

水を一杯もらって、一気に飲み干した。

「大丈夫？随分長くお風呂に入ってたみたいだけど、のぼせちゃってない？」

気にしてくれるのは、ツナの母親、奈々だった。優しいその口調は、やはりどうしてもユウキには慣れないものだった。

「ちょっと長湯しすぎちゃったみたいですが、大丈夫です」

「そう？ならいいんだけど、無理しないでね？」

願わくば、そんな風に笑ってほしくなかった。そんな優しい表情されたら、欲しくなってしまう。

親の愛情が、欲しくなってしまう。

もう無理だと分かっていても。

標的２０　歪んだ過去（後書き）

……散文。

標的２１　雷の守護者戦にて

その夜、沢田家に忍び寄る影は、しかし何もせずにユウキを眺めていた。

「ねー、本当に連れて行くのー？」

幼い相棒の間延びした声は、これで何度目だっただろうか。

「連れて行くのにはまだ早いよ。でも確実に連れて行く」

そう、あの命令には逆らえない。あの縛り付けるような声は、完全に自由を奪った。

「勝負は、雷の守護者戦か……」

「んー？何言ってんの？」

命令の実行は、もう目の前まで迫っていた。

「ランボーファイッ！！！」

「オ――――――ッ！！！」

了平の掛け声とともに気合を入れるツナ達を尻目に、ユウキは屋上の小さな段差に腰掛ける。そこにはなぜかレイもいて、リボーンとひそひそ話している。

――――まただ

また、ユウキの知らない所でレイが話を進めている。リボーンとだっていつ会っていた？何もかも分からないことばかりだ。ユウキは何だか疎外感を感じ、不意にランボへ近付いた。

「ランボさん。バトルが始まったら、１０年バズーカを撃ってください」

「ちょっユウキちゃん！大人ランボに止められてるんだってば！！」

ユウキはツナを静かに見つめ返して、「大丈夫ですよ」と言って

また元の位置に戻る。ランボとすれ違う際に、一つのメモをバズーカにひっかけた。

『10年後ランボへ。もう一度バズーカを使うこと』

と書かれたメモだった。

戦局は激しさを増した。そう、大人ランボがメモの通りに動いてくれたのである。

「電撃角（エレットゥルホーン）!!!」

20年後ランボの角から電撃が伸び、レヴィに届く。

「ぐあああ!!!」

「年季が違う。出直して来い」

本当だったら子供に戻るはずの場面で、しかしランボは戻らなか

った。メモのおかげで、少し時間が稼げたようだ。

「レヴィ・ア・タンは戦闘不能とみなされ、雷のリング争奪戦はランボの勝利です」

原作とは違うコールと共に、雷の守護者戦は幕を閉じた。

「おい、ユウキ。どうして物語を曲げた？もしもこれで……」

レイがユウキに話しかけてきた。無論どことなく気まずそうではあったが、普段通りだった。

「もしもこれで、何ですか？結果が変わってしまうかも知れない？ならば万々歳ですよ。自分はあくまでヴァリアーの人間ですから」

冷たく言い放つも、それが本心かと聞かれればそうではないと即答できる。最初は、物語に変化を加える気などなかった。ただ堕ち神を倒すためにこの世界にやってきたのだから。

しかし、状況は変わった。レイは真実を、ユウキには教えてくれない。何かを隠している。

レイを信じられない。

ユウキは扉に向かい、屋上から姿を消した。

標的２２　見知らぬ青年、動きだす運命（前書き）

あ、えと。

先に言っておきますが今回は短いです。はい。

ちょうど良いところで切るためにはこうするしかなかったのです。

長らくお待たせした更新なのにすみません。

標的２２　見知らぬ青年、動きだす運命

「どうも」

ユウキの上から降ってきたのは、聞き覚えのある声だった。ユウキが見上げるとそこには、カイとルルの姿があった。

「……何ですか？レイに言われて連れ戻しにでも来ましたか？」

鋭く言い放ったユウキを、しかしカイは最初と変わらぬ目で見つめてくる。その纏わりつくような視線に、ユウキは思わず鳥肌が立ってしまった。

「ユウキ、僕がここに来たのはそんなことの為じゃなくて、むしろ君を誘拐するためだよ」

「右に同じですー」

ルルもいつもと変わらない間延びした声で言い、ユウキはそれを理解できなかった。

「は？誘拐？」

「そう。誘拐」

あっさりと言ってのけたカイは、さらに続けた。

「僕の主人(マスター)が君を欲しがってるのでね。悪いけど攫わせてもらうよ？」

カイは言うが早いかユウキに近づき、妙な薬品の匂いがする布をユウキの顔に当てた。無論ユウキがそれを避ける術はなかった。

「おや、あれは確か……」

怪しげな三人組の会話の一部始終を見ていたのは、見たこともないくらいの美形な男だった。その男はその様子を見て、特に何をするわけでもなくその場を立ち去った。ある目的のために。

ねぇ、ユウキ。

あなたはこんなところで何をしているの？

やるべきことがあるのでしょう？

私のお願いをきいてくれるのでしょう？

だからこの世界に来たのでしょう？

ねぇ、ユウキ。

私を、あの人を、信じて。

標的２３　二人目の堕ち神

ユウキが目を覚ました時、既に手足は拘束されていた。

「…ここ、どこ？」

ユウキはまだクラクラする頭で、無理矢理に体を動かしあたりを見回す。

コンクリートの壁、割れた窓、荒らされた椅子や机――――どこかの廃ビルらしい。

「おはよう、ユウキちゃん」

無駄に響くその声は、聞いたことの無い男の声だった。いや、男というよりは少年に近い。まだあどけなさの残る声だった。

ユウキはその声の主を探そうと暗い室内を見回した。するとそこに一つだけ、廃ビルにはふさわしくない豪華なソファーがあることに気が付いた。ちょうど月の光で逆光になっているうえ、相手は座っているのでどんな奴かは分からないが、おそらくそれが声の主だろう。

「誰ですか、あなたは」

ユウキがすごみながら言っても、結局相手の優勢に変わりはない。

相手は余裕とでも言うようにケラケラと嗤った。

「この状況で、ユウキちゃんはすごいね。そんな反抗心むき出しにしてると殺されちゃうかもよ？」

明らかにからかい口調の相手は、がぜん余裕で腹が立つ。無論ユウキ自身、何もできない自分に腹が立つが。

「誰ですか？」

さらに強くユウキは言った。最早相手に負けているのは分かっている。余裕がないのも相手には分かっているだろう。しかしここで引き下がる訳にはいかない。

「僕？僕はねェ、リュート。堕ち神だよ」

「――――堕ち神……」

自ら名乗る堕ち神。そして、カイとルルの主人（マスター）ということか。

「僕ずっと前から君のこと欲しかったんだぁ。なんたって君はレイのトクベツだからね」

「特別……？」

ここでレイの名前を聞くとは思っていなかったユウキは、一瞬驚き、そして特別という言葉に反応した。

「どういうことですか、特別って？」
「ありゃ、知らない？レイは昔は人間で、君の――――」
どうにも口の軽そうなリュートと名乗る堕ち神は、しかしそこまで言って口を閉じてしまった。
「この先は秘密。もしもユウキちゃんが僕のお願いをきいてくれたら話してあげても良いけど？」
理不尽な交渉だ。ユウキは拘束されているうえに相手の情報を持っていない。下手に返事をすればきっと殺されてしまう。はっきり言ってユウキは今ピンチだった。
「ユウキ」

一際大きな声が聞こえ、割れている窓枠を通り抜けている人影が見えた。心地の良いこの声は、レイの物に間違いない。だが――――

「レイ、久しぶりだねェ。いつ以来かな…最後に仕事した時以来だよね？」

リュートが馴れ馴れしくレイに話しかける。どうやらリュートもまた、タクマと同じようにレイのことを知っているみたいだ。

「……た…」

ユウキはレイに拘束を解いてもらうと同時に立ち上がった。

「また……」

「どうした、ユウキ？」

「……」

二人ともユウキの様子に反応した。レイはさも驚いたように、リュートは予想通りとでも言うように。

「また、自分の知らないことばかりです」

それを言うのと同時に、指につけていた忠実なリング（フェデルタリング）が熱を帯びユウキの指を締め付ける。

「何なんですか一体？堕ち神って、神って、自分って……」

下に向けていた視線を、レイに向けて言い放った。

「一体何なんですか！？」

少し潤んだユウキの目から、一筋の涙が零れる。それが地面に落ちる刹那、ユウキは黒い炎に全身を包まれた。全く熱くない死ぬ気の炎に。

標的２４　忠実なリング

「あぁ、やっぱり。ユウキちゃんって絶対黒い炎だと思った」

ソファーから立ち上がり、月の光に照らされたリュートの顔はまさしく少年で、多分ランドセルを背負っていてもおかしくない年齢だ。

「…ユウ……キ？」

レイは目を見開きユウキの炎を見つめる。煌々と輝くそれは、確かに闇の色をしていた。レイの予想に反して。

だが心の中でこういった事態になることも予測していたはずだ。初めてユウキに会った時から。

「一体何なんですか、貴方（レイ）は！」

更にユウキの炎が大きくなった。

フェデルタリング

それは常に使用者に忠実なリング。使用者の能力によってその力のレベルも変わる。弱い者が使えば弱くなり、強い者が使えば強くなる。真に使用者と認めた者とその心を通わせ、その感情に伴って力が増幅することもある。

今のユウキのように。

「ユウキちゃんって、結構強いね。光の方も反応してる」

リュートの言葉に驚き、ユウキの指を見た。確かにフェデルタリングは光と闇、両方とも指に嵌まっている。そして、微かにだが白い光が見える。

———まだ、どっちつかずということか？

フェデルタリングは、特殊な人間にしか使えない。それ故、今までに使用者はユウキとレイともう一人しかいなかった。そしてさらにフェデルタリングの属性は≪光≫と≪闇≫に分かれる。レイは光しか使えなかった。

「ますます使えるね、ユウキちゃん。やっぱり堕とさないといけないなぁ」

「お前っそんなつもりでユウキに近づいたのか！？」

リュートが零した言葉に、レイは怒りを覚えた。そのままリュー

トにつかみかかる。それと共にあの時の記憶が蘇ってきた。

あの時も確か、コイツに裏切られた。

「……ねぇ、過去の回想に耽(ふけ)るのはどうでも良いけどさぁ、本当にユウキちゃんが欲しいんだよね、僕」

過去の回想に耽る。そんなことしていないと言い切るには、レイは少し表情に出し過ぎた。レイはリュートから手を放し、ユウキに向き直る。ずっと下を向いたまま、ユウキは肩を震わせて———

泣いていた。

「もう、嫌です。また隠しごとですか！？またレイはそうやって何も答えてくれないんですか！？」

ユウキは下を向いたまま叫んだ。そう、いつもレイは何も言わな

い。今回のこともそうだけど、タクマのこと然り、ユウキのこと然り。

「……話すよ、ユウキ。全部、話すから」

優しく、なだめる声。あぁ、駄目だ。この声には逆らえない。ユウキの心まで届く温かい声はどこかで聞き覚えのあるような懐かしい声で、それでユウキの中にある薄汚れた感情を、一つずつ溶かしていってしまう。

自分でも自分が分からない。
結局自分は何を知りたいのだろうか。

ユウキはそんな問いかけに、自分で答えを出すことができない。堕ち神について？レイについて？――――きっとそんなんじゃなくて、他のことだと思う。なんだろうこの気持ちは。どこか、あの頃と似た感情がユウキの中に溢れてくる。

両親の遺品を見つけたあの頃と。

標的２５　偽りか、真実か

――――あぁ、何故炎に包まれているのだろう

ユウキはふと自分の身体に纏わりつく炎を見た。どす黒い闇色の炎は、ユウキの指に嵌まっているリングの一つから出ていたが、驚くことにもう一つのリングからも炎が出ている。今のユウキを包む黒いものではなくて、純白とも言うべき白い炎が微かに出ていた。

「ユウキ、全部話すから。だからまずは落ち着け？」

レイがそう言った。

全部話すから。

その中にユウキが欲しい答えは、あるのだろうか。この喪失感のようなモヤモヤを、払しょくすることは出来るのだろうか。

そんな思考ばかりが頭の中を巡って、なかなか感情が押し止められない。

レイハ、ナニカヲカクシテイル

シンジテイイノダロウカ

ホントウニレイハ、ジブンノミカタナノダロウカ

そんな単純な問いかけは、しかしユウキにとっては一番重要なことだった。それでもレイが話してくれるというのなら、その話を聞

いてから判断するべきことだと思った。
だから一先ずユウキは、慣れない感情コントロールで炎を抑えた。見事にそれは上手くいった。

「ユウキちゃん。よくフェデルタリングを使えたね。しかも両方共」
いかにも小馬鹿にしたような声が聞こえた。もちろんその声の主はリュートだ。
「こりゃホント僕は運が良いやぁ。なんたってレイの前で君を堕とせるんだからね」
「貴様っ！！」

レイがリュートを抑えようとしたが、手遅れだった。リュートはそのレイの腕をかわし、代わりに何か術をかけた。そして一歩一歩ユウキに近づいて来る。

「ねぇ、君がレイのトクベツだって言ったでしょ？その理由はね――」
「ヤメロ！」

レイの制止の声が、今は邪魔だと思った。それ位、ユウキの好奇心はリュートの言葉に釘付けだった。

「君が、レイの娘だからだよ」

一瞬周りの音が聞こえなくなった。
リュートが歩く度に鳴る靴の音も、レイの制止の叫びも。

しかしユウキはすぐに正気に戻った。今聞いた内容が本当かどうか確かめるために。

「レイ、今の話は――――」
「ユウキちゃん。僕のお願い聞いてよ」

リュートがいつの間にかユウキの目の前に立っていた。ユウキの言葉を途中で遮り、目を細めて言った。

「ユウキっ！くそ、体が動かねぇ！！」

レイが苦しそうに身じろぎしている。多分リュートがかけた術の

所為だ。

「ねぇ、ユウキちゃん」

もはやリュートの顔に笑みはなく、虚ろな瞳がユウキの恐怖を誘った。さっきの言葉を気にしている暇もなく、ユウキはある思考に駆られた。

目の前の敵を倒さなければ。

ユウキは恐怖で動かない腕を、しかし必死に動かして眼帯を外した。

レイがリュートの術から抜け出せないのはその所為だと思ったからだ。

そして思った通り、ユウキが眼帯を外した刹那レイは体の自由を取り戻してユウキをリュートから遠ざけた。ほんの一瞬の出来事だった。

「レイ……本当に君って面倒くさいよね。でも、ユウキちゃんに嫌われちゃったかもよ？」

リュートの言葉は核心をついていた。

レイが最も恐れた事だ。だが、ユウキが自らの意思で眼帯を外したのならば、今は助けて欲しかったのだと思う。

ならばレイが取るべき行動は一つ。

ユウキを守る事だった。

標的２６　月の光

実体をもたないレイの力が解放されると、すぐに勝負はついてしまった。さすがは神というところか。

「やっぱり強いね、レイは。全然敵わないや」

リュートはあっさりと負けを認め、そしてユウキを一瞥した後嗤った。

「でも、いつまでもつかな？信頼を失った“神様”は、いつまで正気でいられるかな？」

レイが苦しそうな顔をする分、ユウキの胸がチクリと痛む。

分かっていた。話の途中から。

ユウキの存在が、レイの重荷になっていると。

「はい、そこまで」

不意に廃ビル中に声が轟いた。
ユウキたちが声のした方向を振り向くと、そこには見たことも無いくらい見目麗しい男と、相反する厳つい体つきの男が二人、窓枠にもたれかかっていた。

「どうも、こちらは天界秩序維持特務機関です。今回は現行犯で逮捕しますよ、リュート」

よく通る声で美形の男がそう言って、リュートに近寄りその手に手錠をかける。

リュートはチェッと舌打ちして、しかし大人しく二人に連れられていった。最後に、

「残念、ユウキちゃんまたね。まぁ、生きていればだけど」

とおどけたように言い残して。

天界秩序なんたらと名乗った男たちは、最後にユウキたちに深々と礼をして、「ご協力ありがとうございました」と言って去っていった。

そして、その場に残されたのは、気まずいまんまのユウキとレイだけだった。

お互いに口を開かないまま、どのくらいがたっただろうか。

口火を切ったのは、ユウキだった。

「リュートの……リュートの言っていたことの、どこからどこまでが本当ですか？」

重く、威嚇するような声になったのは、緊張しているからだろうか。

レイは顔を背けた。月の光が、ちょうど逆光ののようになり、その表情は窺えない。

「それは……っ」

レイの声が震えている。

レイが何を思っているのかは、表情が見えなくても分かる。

しかし、一瞬間をおいたあと、レイは意を決したように言った。

「リュートの言ったことは、全て本当だ」

この瞬間、ユウキは自分の表情がどう変化したのか分からない。もしかしたら何も変わらなかったかもしれない。変に歪んでいたかもしれない。

とにかく分かっていることは、大きな衝撃を受けたということだ。

指に嵌まっているリングが、ジリジリと熱を持っていた。

標的27　錯綜する真実を求めて

重苦しい空気のまま、ユウキもレイもまた黙り込んでしまった。

ユウキはレイをじっと眺めて、考える。子供の頃の写真しか見たことがないが、面影があるような、無いような。

『何しとるんじゃ、レイ』

突然建物内に老人のしわがれた声が響いた。

『お主は何物にも心を乱されてはならんじゃろうが』

今度はその声と同時に、老人と二人の姿が現れた。

「カイ、ルル！？」

ユウキは驚きで声を上げ、レイも何かに驚いている。

『お久しぶりですー。まさかお忘れではないですよねー』

『久しぶり、元気だった？』

カイとルルが変わらぬ口調で言った。

「久しぶりって、さっき自分を連れ去ったのは、あなた達では？」

ユウキが訝しがりながら言った。もちろんユウキは彼らの姿をはっきりとみている。

『いいえ。いや、確かに連れ去ろうとはしましたけど、堕ち神リュートに邪魔されまして』

『そのためルル達はこのじいさんと一緒にいる次第ですー』

ルル、口が悪くなっている。とは心の中で思い、頭の中で錯綜する事柄を整理してみようと思った。

一、ユウキがカイとルルに、ここに連れてこられた。

が間違っていて、本当は、ユウキがカイとルルに連れ去られそうになったところを、リュートがかっさらっていった。

第一の疑問。

「カイとルルは自分を、どこに連れ去ろうとしたんですか？」

ユウキはカイとルルに向かって、いや、実際はここにいる気配がしないから、表面上はカイとルルの姿をした何か、に向かって質問した。

『ここ』

カイが短く、かつ分かりづらく答えた。

『えっと、つまりここっていうのはここで、君たちのいる所じゃな

くて、僕たちのいる所』
「つまり天界か」
レイが冷静に呟いた。
「何のために自分を天界へ？」
ユウキはまた尋ねた。もちろんレイとの問題は片付いていないが、それよりも、というかそれを考えるのは億劫だった。
『そりゃわしが頼んだのじゃよ』
質問に答えたのはカイとルルと共にいる老人だった。
ユウキが訝しげに老人を見ると、彼は一つ咳払いをして、ユウキに向き直った。
『わしの名はフィーレ。こいつらの本当の上司じゃ』
フィーレと名乗る老人は、カイとルルを指してそう言った。しかし、カイとルルの上司はレイだったはずではないか？　本人も、「仮にも上司」と言っていたし。
ユウキが考えているのを見抜いたのか、フィーレがふぉっふぉっ、といかにも仙人のような笑い声（見た目もだが）で言った。
『実はの、レイはまだ試用期間なのじゃ』
「え、神様なのに？」
ユウキがそう返すと、フィーレは大きく頷いて、

『そうじゃ。それなのにいっちょ前に神使など雇ってからに……』
「神使？　なんですか、それ？」
『おや、レイは説明しなかったかね？　君のことじゃよ』

新たな真実、発覚。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2409u/

REBORN!に転生☆

2011年12月26日23時45分発行